兵になれる[[1]](#footnote-1)

香山光郎

外出から歸ると、「金子敏」の名刺があつた。一寸思ひ出せなかつた。

しばらくすると李君から電話がかゝつて來た。金子少將が久方振りに京城へ歸つて來た[か]ら、一夕談じようといふのである。

「あ、金子少將か」

私は金子敏が金子少將だと分つて、なつかしい氣持になつた。

もう十四年も前だ、滿洲事變よりも前であつたから。あの子が生きて居れば、今年二十のはづだから。あの子といふのは私の長男のことである。

さやう十四年も前の或る夏の日だつた。鳳一といふ私の長男と、龍三といふ私の次男とは、それぞれ六才と四才の悪戯ざかりであつたが、東小門街道を通る軍隊を見たといつては、軍服を買つて呉れとねだり出したので、おもちやの軍帽と、軍刀を買つてやつたら、それが好きで、軍帽も軍刀もつけたまゝ、私の書齋に寝ころんで晝寝をしてゐた。私が書きものを終へて振り向くと、このありさまなのである。私は最初微笑したが次の瞬間は黯然とした。彼らは兵になれない運命にあるのだと思つたからである。朝鮮人は兵役の義務のない國民だつたのだ。その日の私の日記に、かう記してある―――

「二人の小さい兵士は、刀を佩いたまゝ寝てゐる。如何なるいくさの夢を見てゐるのであらうか。それでよろしい、夢の中でいくさをせよ、そして勝利を得るがよい。現実ではお前たちは兵になれぬのだから。」

これは、親として悲しいことだつた。子供たちが成人したら、どれほど肩身の狹さを感ずることか。片輪の子を生みつけたやうな怨めしさゝへ私も感じたのであつた。

丁度その時である。金子大佐が、ひよつこり跳びこんだ。大佐は當時、朝鮮軍の高級參謀で、朝鮮の民心の動向に深い興味をもつてゐたらしい。大佐は、内鮮關係の歴史には相當造詣が深かつた。今日の日本人の中には、高麗、百濟、新羅の歸化人の子孫が一千八百萬人はある、など新撰姓氏録のことを、よく吹聴してゐたのも金子大佐である。

「金様、だしぬけに失禮。」

金子大佐は氣輕に上つて來た。大佐は丈の低い眼の光る、とても敏感さうな人だ。

實際だしぬけであり、不意打ちである。大佐と私とは、宴會などでの知り合ひであつて、親友でもなんでもない。その金子大佐が、私の家に來るなんて、夢想だもしないことであつた。

「ようこそ、さあどうぞ」

とはいつたものゝかういふ珍客を請じいれる座敷がない。書齋とはいつたものゝ、小さな朝鮮間一つで、しかも、そこでは小兵士二人が晝寝をして居る。私は當惑せざるを得なかつた。私が小兵士たちを起しにかゝると、大佐は、手と首を同時に振つて、小聲で、

「起しなさんな。兵隊さんには睡眠が何よりも御馳走だ。私たちが、こゝで小聲で話をする位では、兵隊さんたち中々眼が醒めやしないでせう。銃聲ならとかく。」

大佐の機知に私は助かつた。そしてこの人が好きになつた。如何にも開けつぱなしで、氣の置けぬ人と感じたのである。

「一寸、通りがゝりでしてね。」

と金子大佐は、板の間に腰をおろして、上衣のボタンを外し、たばこを吸ひ出した。

「實は經學院を見に來た歸りがけです。經學院の庭はいゝですな。すばらしいいてふの老樹ですな。」

經學院とは、京城における孔子廟である。私の家はそれから程遠からぬところにあつた。

「お一人ですか」

　私は打寛いだ氣持になれた。當時はまだ、内地人と朝鮮人と會ふと、お互に腹を探りあふやうな雰囲気に包まれたものだ。

「え、ぶらつと出かけましてね。實はあなたに會ひたかつたんですよ。あなたの住所を、さる人に聞いたら經學院の少し手前だといふので。」

物を言ひ言ひ、大佐は私の家を見廻してゐた。そして、その視線は、しばしば晝寝の小兵士に止まるであつた。

「さうですか。それは、どうも恐縮致します。」

わざわざ私如き無名の一書生を訪ねてくれた、金子大佐の好意が、ほんたうにありがたかつたのである。

「この邊は靜かでいゝですな」

とか、

「毎日書き物をしてゐるんですか」

とか、子供たちのことなども話して、序曲ともいふべき四方山話が、一通りすんでから、大佐は、丁寧に上衣のボタンをしめ直して、

「こないだの晩、あなたは徴兵論を主張されましたな、今朝鮮民衆がもつとも願つてゐるのは徴兵令の施行だと申されましたね。」

といつて、あの鋭い眼で、私を見つめるのであつた。

「はあ、たしかに、さう申しました。」

私は確信の落着きをもつてかう答へた。

「ほんたうにさうでせうか。」

疑ふよりも、たしかめたい面持ちである。

「私はさう信じます。」

「失禮ですが、どういふ根據で、あなたは徴兵を願ふんですか。」

これは誠に急所に觸れた問ひである。

私は、手を上げて、鳳一と龍三の寝姿を指した。

金子大佐の眼も二人の上に落ちた。二人の小兵士の軍帽の下からは汗が流れてゐた。軍帽は赤かつた。龍三は喇叭の赤い紐をしかと握つて居る。白地に青の縞のパンツと、同じく白地に青の緣を取つた水兵服に、陸軍の軍帽と軍刀をつけたさまは滑稽であるが、しかし、この瞬間、それは悲痛なものに見えた。

大佐は、しばらく二人の寝顔をぢつと見てゐたが、大きく、一つ、溜息をついた。

「分りました。あなたのお氣持はよく分りました。」

金子大佐は自分で自分のことばに肯いて居った。

私は無言であつた。

「屹度この坊ちやんたちは兵になれます。」

金子大佐は感に堪へぬごとくであつた。

金子大佐と私の交はりは、これだけであつた。大佐は、その後間もなく少將になつて、どつかの旅團長になられたが、滿洲へ移つて、どうしたものか、軍職から身を退いて、大陸で浪人をして居られると聞いたのであるが、その金子大佐が今京城に戻つてゐるのである。

私は時節柄食事を遠慮するつもりで、一時間ばかり遲めに李君の家に行つたら、金子少將夫妻も主人も、相當酔が廻つてゐた。

「やあ」

「おお」

で、挨拶は濟んだ。さも毎日會つてゐる人たちのやうな挨拶の仕方であつたが、さすがに金子夫人だけは叮嚀に、婦人らしい挨拶をした。私も二三度頭を畳につけて、お辭儀をした。

「あまり變りませんな」

金子少將は、私に盃を渡しながら、快活にいつた。私の頭髪に白髪が少いことをいふのだらう。金子少將は、けてゐた。皺も多くなり、何よりも髪が薄くなつてゐる。そのはづだ。もう大將になつたはづの年配だから。しかし、その朗らかさは變つてゐないばかりか、永年の自由な浪人生活で角が取れてゐて、もつと親しみ易くなつてゐるやうだつた。それは必らずしも、丸腰になつたばかりではないらしい。

私は勸められるまゝに愉快に飲んだ。後來三杯だといふので、主人の李君も少將夫妻も矢繼早に、私の盃を充たして呉れた。

ストーヴは赤くなつてゐて、師走の晩とも思はれない。酒が廻るにつれて、上衣でも取りたいほどであつた。しかもガラス窓越しに見える熱帶植物が、一層暖かい感じをくれる。主人の李君は、三百種からの熱帶植物を持つて居る。金持でもないのだが、詩人で、憂國の士で、永いこと喘息を煩つて、冬は外出の出來なかつた父を慰めるために、なけなしの財布を搾つて聚めたものである。李君の父はなくなつて已に三年の喪も明けたけれども、李君は地下室や温室をつくつて、この、父の手澤のある熱帶植物を守つてゐるのである。

「金さん大いに飲まうぢやありませんか」

金子少將は、子供のやうには[しや]いで居る。

「たうたう徴兵と定まりましたな。僕が五月八日の、あの閣議の決定のニユースを聞いたのはチゝハルに居る時でした。泣けましたね。實に感極つた。」

少將は自分の言に裏書することを要求するやうに、夫人を顧みた。

「さやうでございましたね。金子はぽろぽろ涙を落しましたのよ。」

　と夫人は、私に向つて、

「そして、金さんに會ひたい。金さんは喜ぶだらう。あの二人の坊ちやんももう大きくなつたらう。大きい方の方は、もう適齢になつたのかも知れぬなど、それはそれは、あなたさまのことを口説く申して居りました。ほんたうによろしうございましたわねえ、徴兵が朝鮮に布かれることになつて。」

と、心から喜んでくれた。

「さ[あ]、祝盃、祝盃。」

金子少將は盃を上げた。われわれは、盃を上げて、ぐつと飲みほした。實に愉快であつた。金子少將が、朝鮮徴兵のために、一つの埋もれ石になつたことを、私も聞いて知つてゐるが、五月九日のニユースで、涙を流したと聞くと、抱きつきたいほどの懷しさを感じた。私は少將に私の盃を勸めた。少將は快く受けた。

少將は飲みさした盃を卓の上に置いて、兩手を膝について、感極まるやうに首を二三度振つた。

「やあ、實際あの場面は、千言萬語で、言ひ盡せない感動を得ましたな。あのおもちや軍刀のつかを握つて寝てゐる二人の赤子――陛下の赤子ですぞ！　あの二人から、兵になる權利を取り上げるものは、そも誰ぞ。若しさういふものがあるとすれば、それは、日本の敵である、と思いましたね。あのいたいけない赤子たちに一つでも、塵ほどでも

自尊心を傷[つ]けたり、侮辱を感じさせたりしてはまことに　上御一人に對したてまつつて申譯がないと思ひましたな。實は僕は、あの日、徴兵についての、金さんの本當の腹を探りに行つたのでした。今だから白狀しますが、私はあなたの徴兵論を其儘には取らなかつたのです。これは腹に一物あるな、と思つたのです。これは私の不明であつたし、邪推であつた。誠に、恥ぢ入ります。しかし當時は、私どもには、それだけの素直さがなかつたんですね。それで、私は、世間からは、民族主義者とさへいはれてゐたあなたの腹を探りに出かけたのでした。――私が、あなたは、どういふ根據で、徴兵論を主張するのかと、訊いた時に、あなたは、無言で、二人の坊ちやんの寝姿を指されましたな、軍帽と軍刀をつけて、一人は喇叭を握つてましたね。それで私は迷が晴れたんでした。その場では、さうとも申し上げ兼ねましたがね。あの時のあなたの氣持は、すべての朝鮮のお父さんの氣持と分かつたんです。それ以上、私としては何も申上げられぬですがね。一言にしていへば、あなたのそのお氣持が、大御心に達したんです。それは、部内でも、朝鮮の徴兵に關しては、尚早論や反對論や、いろいろあつた、しかし結局は、きまつたんです。正しいことは通るのが日本のありがたさでしてね。

こゝで少將は飲み殘しの盃を上げて、飲み乾して、それを私に廻はした。

「そうですか、そんなことがあつたんですか。」

李君は、しつきりに感心して居つた。

「はい」

と金子夫人は、私の盃に酒を注ぎながら、

「金子は何遍も何遍もそのことを申して居りましたの、二人の坊ちやんの寝姿のことを。そして、あの子たちを悲しませては申譯がないと、いつもいつもさう申しましてね。もうその御子さま方は大きくお成りでせうね。大きい方の方はもう高等學校でせうか」

と私の眼を窺いた。

私は口まで持つて行つた盃を、卓の上に置いた。何とお答へしたものやら、はたと當惑して首垂れた。その時、李君が傍から、

「金さんの大きい方の坊ちやんはなくなりました」

と、私に代つて答へてくれた。

「ええ、なくなつたんですか。」

「まあ、お氣の毒なこと」

と金子夫妻は、こもごも驚いてくれた。

「は。」

私も黙つてはゐられなかつた。

「小學校入學間際に。」

私の眼には鳳一の病氣や死の光景が、まざまざとうかんで來た。もう十何年も前のことで、悲しみも記憶も薄いはづなのに、機會が機會であるためだらうか、驚くべき鮮やかさをもつて、鳳一に死なれた悲しみも記憶も、私の心に甦つて來た。李君は、

「鳳一君の死には、實に心を打たれるものがありました。金さん御夫妻も、あの時は隋分力を落されましてね。金さんの宗教生活は、たしかに、鳳一君の死に始まつてゐると思ひます。また、金さんが十何年一日のごとく徴兵論で來たのも、恐らく鳳一君の死がその全部でないまでも、もつとも力強い一部の原因だつたでせうな。それには、悲しい物語があるんですよ。」

と、私の發言を催促するものゝ如く、私を顧みた。

金子夫妻の視線も私に集まつた。

私は、前に置いてあつた盃を上げて、口につけた。喉も唇も乾いてゐて、冷いものがほしいほどであつた。親として、世に子供ほど大事なものはない。死んだ子供は、いつ思ひ出してもいとほしく、生きてゐてくれるといゝがと、愚痴が出るものである。同じ子供でも特に、親の氣に入りといふものがある。さういふ子供に先立たれるといふことは、鳳一が正にそれであつた。最初の子であつたゝめでもあらうが、あの子に私は深い情と大きい望みをかけてゐた。傍から見たら溺愛であつたらうけれども、私としては、あの子に人並以上優れたところを認めたのである。

「お前はいゝ子になるぞ。きつと世の中に役立つ大人物になつてくれ」

と、私は明け暮れ、鳳一のために祈つてゐたのである。

ある日のことであつた。それは二月のまだ寒い日であつたが、鳳一は幼稚園からいたく打ち萎れてかへつて來た。

「どうしたね、鳳一？どこか痛いのか。」

「ううん」

鳳一は首を振つて否定するのであつた。

頭をさすつて見たが熱もなかつた。

それでも鳳一は、その日は一日中沈んで居つた。弟の龍三が遊ばうと誘つても、いゝ加減にあしらふばかりで相手にしなかつた。急にませたやうで、私は心配になつた。

鳳一の氣を紛らすつもりで、私は、

「鳳一、床屋へ行つて、髪短かく刈つて貰へ。小學校へ入るんだからね。もう間もなく小學生だからね」

といつて見たが、鳳一は飛立つ様子もない。私は妙に氣になつたが、來客などもあつて夕方まで鳳一と會はなかつた。

「お父ちやん、御飯。」

鳳一が私の書齋へ來た。書齋といふのは、離れのサランである。

鳳一の頭は坊主刈になつてゐた。一人で床屋へ行つて來たらしい。

夕飯の時、鳳一は、

「お父ちやん。朝鮮人は兵隊になれない？」

と妙なことを私に尋ねた。

私ははつとした。兵隊の問題でまた胸を痛めてゐるのだらうと見て取つたからだ。いつかも、隣の酒屋の子供に、朝鮮人は兵隊になれないといはれたといつて、鳳一が憤慨して歸へつて來て、私に今と同じことを聞いたことがある。その時私は、

「お前が大きくなつた自分には兵隊になれる」

といつて、なだめてやつた。

「お前が大きくなつた時には、朝鮮人も兵隊になれる、といつたぢやないか。」

私は、いつかの答を繰返へしたが、鳳一は、今度は、私の言葉に信を置かないやうすであつた。

しばらくだまつて、御飯を食べてゐた鳳一は、

「鳳一、明日からは幼稚園行かないよ」

と宣言した。それはたしかに、宣言といふことばにふさはしい、いひきり振りであつた。眼付にも口元にも、並々ならぬ決意のほどがあらはれてゐた。

「誰が、何いつた？鳳ちやんをからかつた？」

妻も鳳一のたゞならぬ氣色が氣になつたらしい。

「違ふよ。」

鳳一はそれ以上は口を利かなかつた。

翌日、鳳一はどうしても幼稚園へは行かうとしなかつた。あと一週間で、幼稚園も卒業だからと叱つてもなだめても行かうとはしなかつた。

鳳一はその日から、一切、あの好きな、

「天に代りて不義を討つ」

の軍歌も歌はず、機關銃だの、軍刀だの、戰車だの、そんなものも一切いぢらなかつた。龍三が勝手に、それらの物を占領しても、鳳一は眼もくれなかつた。

或る日鳳一は息を切らして表から歸つて來て、私に、

「お父ちやん。お隣りの權さんのお爺ちやんが死んだよ。皆でアイゴーアイゴーつて哭いてゐるよ」

と眼を丸くしてゐた。成程哭聲が聞えてきた。

「人間は年をとると死ぬんだよ。權さんのお爺さんは年寄だらう。」

私はかう説明してやつた。

鳳一は眼をぱちぱちしながら、しばらく何か考へ込む様子であつたが、

「お父ちやん。人間は死んだらどうなる？」

と如何にも眞面目なる面持である。

私は當惑した。實は私も、人間の生死に對してはつきりした答への持ち合はせがなかつたのである。私がまごまごして居ると、鳳一は、

「人間は死んだら、どこへ行く？」

と、畳みかけた。

「お釋迦さまはね、人間は死んだら、惡者は惡いところへ、よいものはよいところへ生れかはるとおつしやつてゐる。」

私はかういつてしまつた。私自身に信念もないことだが、せめて子供に死の恐怖を植ゑつけたくないからであつた。

鳳一は安心したらしい顔をしてゐた。

それより二三日後、鳳一は一寸した傷が元となつて、敗血症を起した。盡せるだけの手を盡したけれども、発病五十二時間目に數へ年七つの短い一生を終へた。

鳳一が、なくなる日の朝であつた。幼稚園の小倉といふ先生が、鳳一の見舞に見えた。鳳一が幾日も出席しないものだから、子供たちに訊いて見て、病氣と分かつたんださうである。しかしその時には、鳳一は昏睡狀態であつた。

「おい、鳳一、小倉先生がいらしたぞ、小倉先生が」

と私は小倉先生に對する儀禮上鳳一の耳に口を當てゝ呼んで見たゞけで勿論返事を期待してはゐなかつた。不思議にも鳳一はぱつと眼を開いた。

「鳳一さん、わたしですよ。小倉先生ですよ」

と小倉先生は、鳳一の枕元に走り寄つた。鳳一の顔の筋肉がひきつるやうに動くかと思ふと、

『先生。朝鮮人は兵隊になれませんか』

鳳一はふるへてゐたが、はつきりと聞き取れる聲でいつた。それは實に悲痛であつた。

小倉先生は、鳳一のいふことを聞くと、顔が土色に變つて、氣を失つた人のやうに、前にのめりかゝつた。

小倉先生はやつと氣を取り戻して、

「鳳一さん、御免なさいね。今はね、只今はさうだといふだけなのよ。鳳一さんが大きくおなりの時は、朝鮮人も皆兵隊になれるかも知れないわ。鳳一さん、金さん」

小倉先生は、涙ながらに呼つたけれども、鳳一はもう眼を開かなかつた。鳳一は内地人児童ばかりの幼稚園にいつてゐたのであつた。

それから二時間ばかり、死戰期がつゞいて、鳳一は最後の別れなのだらう、眼を開けて、

「お父ちやん」

と呼んでくれた。

「水を上げようか。」

「うんうん」

鳳一は私の手を取り、自分の手で私の首や顔を飽かずさすつた。その手は火のやうに熱く、眼は異様に輝いて居った。

鳳一は何度も私の顔を撫で廻はして、力なくその手を、自分の胸の上に落としながら、

「お父ちやん。人間は死んだら、生まれ變る？」

と、今度は小さい兩手で私の手を握つた。

「生まれかはるよ。お前は罪のない、よい子だから、きつとよいところに、よい家の子に生まれかはるよ。」

私は、力を込めていつたのであつた。

「ううん。今度もまた、お父ちやんの子に生まれかはる。その時は兵隊になれる？」

鳳一は、やつと云ひ切ると眼を瞑つてしまつた。私の手を握つた、その小さい兩手も、わなわなふるへながらベッドの上に戻つてしまつた。

いまはだ。

「うむ、兵隊になれるよ」

　私は人の前をも憚らず、聲涙共に下つた。

小倉先生は、殆んど取り亂した形で、

「鳳一ちやん。きつと兵隊になれますよ」

を何遍も何遍も繰り返してくれた。

私が鳳一の物語りを終ると、金子夫人は涙を拭いた。金子少將の眼にも、眼鏡越しに、大きな涙の雫が光つてゐた。

「さうでしたか。」

四五分ものしめつぽい沈黙の後に、金子少將は『さうでしたか』を、三度も繰返へした。

「鳳一君は天才でしたがね。」

李君は私を慰めようとするのであらう。

「世の中で一番早いものは何？と聞かれて、汽車でもない、飛行機でもない、眼だといつたことがある。ほんとにびつくりしましたよ」

などゝ、鳳一のことを二三度讃めてくれた。

「さあ、一盃頂戴しませう。」

私は、主人の方に盃を向けた。

「そんなことはもう過ぎ去つた物語で、來年からは朝鮮の男の子は皆兵隊になれるんです。内地人だからどうの、朝鮮人だからどうの、といふやうなことは、おひおひ跡形もなくなるでせう。たゞ同じく　天皇の赤子であるはらから――その感情一つになる日も遠くはありますまい。」

「しかりしかり！」

金子少將は冷たくなつた自分の盃を飲み乾して、私に廻はした。

「奥様如何ですか。」

私が盃を向けると、金子夫人は、

「いたゞきますわ。ね、いゝでせう」

と、夫の少將を顧みた。

「よし、よし。それから、何か一つ歌つてくれないか。」

「軍歌を唱ひませうか。」

金子夫人は、その盃を私に返へして、

「天に代りて不義を討つ」

を歌ひ出した。私たちも子供らしく、それに唱和した。

「勝つて來るぞと勇ましく

誓つて國を出たからは」

　私たちは遲くまで、軍歌を唄つて騒いだ。まるで子供に歸つたやうであつた。

歸りに、金子少將夫妻と私とは、一町ばかり同じ方向を歩いた。雪が降りつもつてゐて、しかもそれは乾いた雪で、私たちの靴の下でピーピーと鳴つた。

「さやうなら」

「さやうなら」

といふ別れの挨拶も子供のそれのやうに、陽氣にひゞいた。

私は一人で、北岳颪逆らひながら家路を辿つた。電車もとつくに切れて、大通は電線になる風の音と、私自身の靴の鳴る音だけであつた。

私の心は、鳳一の憶出で一杯であつたが、それでも悲しみばかりではなかつた。

「兵になれる。兵になれるぞ」

私は、一人でつぶやいてゐることに氣がついた。私は大聲を張り上げて、

「兵になれる！」と叫んで見た。

以下波線枠で囲む

筆者　香山光郎氏（舊名　李光洙）

明治学院、早大文學部哲學科卒、

朝鮮新文學先驅者。三十数巻の著書あり。第一回朝鮮藝術賞受賞

1. 『新太陽』14-11、新太陽社、1943年11月1日発行、36～42頁 [↑](#footnote-ref-1)